



生活やものづくりの学びNetニュース

巻 頭 言

生成 AI と消費者教育

東海国立大学機構 岐阜大学教育学部
日本消費者教育学会会長
大藪千穂

日本消費者教育学会と家庭科の関係では、C 領域の「消費生活・環境」が最も結びつきが強いと考えられます。そのような中、AI が急速に発達し日常生活の中に入ってきたことによって、家庭科で教える内容も大きく変わる可能性があります。デジタル時代の消費者リテラシーはどうあるべきかを考え直す必要があります。

私たちは毎日、多くの買物をして生活をしています。水道や電気・ガスなどは毎回お金を払っていないことから、買い物をしているという意識は低いかもしれませんが、知らないうちに消費生活を送っています。そのような中、スマホを介した消費の割合が増えており、同時に消費者被害も増加しています。これまで家庭科の消費者教育分野で教える消費者被害の内容は、訪問販売、キャッチセールスなどが多かったと思います。しかし最近では、特に AI を用いた消費者問題が急増しています。この中でもスマホを介したダークパターンでの通信販売で多くの消費者被害が生じています。

ダークパターンとは、ユーザーを欺き、不本意な決定を促すために設計されたウェブのユーザーインターフェイスデザインを指します。ダークパターンには様々な種類があります。例えば、1 回限りの購入のつもりが、会員登録を必須としていた、月額会員(サブスク)に登録されてしまった、無料のニュースアプリやクーポンアプリをインストールする際に、スマホの連絡や位置情報を共有しないと行けなかった、キャンセルがなかなかできない、最終決裁画面で初めて利用料や手数料が合算された(サunkコスト効果を悪用)、カウントダウンタイマー・期間限定として、画面上にタイマーが表示され、購入を焦らせ、実際には期限はないのに偽の緊急性によって冷静な判断を奪われた、などがあります。本物そっくりの偽ショッピングサイトもあります。

東京都教育委員会の調査では、約 4 割の児童生徒は家庭学習で生成 AI を利用したことがあると答えており、昨年度は 2 割に満たなかったため、急速に利用が増えていることが分かります。プライベートでの使用では、2026 年の 10 代の男女の利用比率が 2025 年に比べて他の年代より高く、14～15%はほぼ毎日利用しており、週 1 回を入れると男女とも約 3 割が利用しているという調査もあります(モバイル社会研究所)。大学での講義でも、生成 AI に家族間の悩みを相談するという大学生が増えてきており、今後生成 AI との付き合い方を学校教育でしっかりと教える必要があります。

法政大学の坂本旬教授は、生成 AI を活用する前に、まずは AI リテラシーと AI 倫理を学ぶことが大事だと説明しています。個人情報の漏洩、誤情報、著作権の問題等、事前に学ぶことはたくさんあります。よく「まずは使ってみれば」と言われますが、生成 AI に関しては、まずは生成 AI の特徴を知ることから始める必要があります。家庭科の消費生活の分野では、買い物という教材を通して使うことができると思いますが、その前にどのような使い方ができ、何に注意すべきかを学校や教員研修で基準を作っておく必要があります。ただ AI の進化はかなり早いので、教師は常に最新の状況を把握しておくことが求められます。

Contents

巻頭言	1
報告 生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会	2～4
2025 年度各地区活動報告	5～7
生活やものづくりの学びネットワーク 第 17 回 (2026 年) 総会資料	8～11
「2026 年度 公開フォーラム」のご案内	12

報告

生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会 多様性と「ものづくり」教育の実践：次期学習指導要領をみすえて

コーディネーター 齋藤美重子（川村学園女子大学）

1. はじめに

2025 年中央教育審議会教育課程企画特別部会による「論点整理」では、「①「主体的・対話的で深い学び」の実装（Excellence）」、「②多様性の包摂（Equity）」、「③実現可能性の確保（Feasibility）」の 3 つの方向性ととともに、技術分野と家庭分野を分離し 2 つの教科にする案が示され、大きな関心を呼んでいる。

生活やものづくりの学びネットワークでは 2025 年 9 月に公開フォーラム「学校教育が担うものづくりに関わる資質・能力の未来—中学校技術・家庭科の動向をめぐって—」を開催し、技術科及び家庭科の意義と今後の在り方について議論がなされた。引き続き本学習交流会では、3 つの方向性の 1 つとして掲げられた「多様性の包摂」に焦点をあて、具体的な授業実践報告と意見交流により多様性と「ものづくり」教育についての議論を深めるべく、学習会担当世話人たちが意見を出し合い企画・運営した。

2. 当日の概要

2026 年 3 月 15 日 13：30～16：00、Zoom オンラインにて開催された。申込数は 60 名であった。

まずは、開会の挨拶及び前述の趣旨説明を高木幸子先生よりお話しいただいた。第 1 部では、新潟県関川村立関川中学校技術科の木島康人先生による「こどもが見通しをもって取り組む木材加工の授業改善」のご報告、続いてお茶の水女子大学附属中学校家庭科の有友愛子先生による「肉じゃがの調理の比較～IoT 家電で調理実習～」のご報告がなされ、その後、質疑応答が行われた。

ご報告の詳細は次ページ以降をご覧ください。お二人のご報告には「教える」という営みから脱規範化の契機が教師たちによって与えられ、生徒が経験を通しながら考え学びとることを身につけていく様子がわかった。木島先生の授業では、未整理な経験を教師の支えや導きの下で主体的・対話的に再考し、統合的な概念的理解へと深める営みであった。また、有友先生の授業では、技術科との連携のもと多角的な視点から多様な暮らし方を学び、暮らしには選択肢があることを生徒に考えさせるものであった。

授業中の生徒の思考・感情・知識のすべてがかけがえのない存在としてその声を受けとめ、自分も社会もより良くするウェルビーイングに向けて授業を行っていたことが窺えた。生徒たち自身が気づき、考えることと、それを丁寧にみとる教師たちが、多様性を認める姿としてあった。

第 2 部ではブレイクアウトルームによるグループでのディスカッションに続き、全体会でのグループごとの発表と木島康人先生、有友愛子先生を交えた応答が行われた。ディスカッションでは、多様性とものづくりの授業・研究をテーマに、具体的に学び方を教える事例、考える視点をどう与えているか、暮らしを多角的に捉える視点をどう考えるかについて話し合いがなされた。全体会では、学び方には教師の意識を変えていくことや題材の構成を工夫することが述べられた。また、安全性への配慮を例にとり多様性と普遍性のバランスを取ること、生徒が能動的に学ぶことや教師のまなざしの重要性が発表された。生徒たちが難しいと感じつまずきやすい「玉止め」について生徒自身がその克服のための動画を作成した事例も紹介された。教員間教科間連携のみならず外部のステークホルダーとの連携や、AI のブラックボックス化への学びの必要性など、様々な発表があった。生徒一人一人のニーズに応じた学びが叫ばれる一方で、教師一人一人にもニーズに応じた学びがあることがわかった。一人で考えるよりもグループで意見を出し合うことで新たな案が出てくるものである。これからの授業方法や研究に多くのヒントをいただけた。

最後に総括と閉会の挨拶は世話人副代表の鈴木賢治先生により、人間としての多様性と普遍性を担保していかなければならないというお話で締めくくられた。

3. おわりに

「ものづくり」教育では、教師と生徒、生徒同士のリアルな対話を重ねることで自分自身や社会を捉え直すことが可能となる。生徒たちは思考することや相手の感情をわかろうとする姿勢を通して、違いを認め合い多様性を実感する。ここに「ものづくり」教育の価値の一つが見出される。もちろん生徒が発言しやすい心理的安全性のある環境づくりと、生徒の声をすくい上げる教師の感度も必要だろう。

「ものづくり」は人間が疑問を持ち、生活をより良くするために問うことから始まるものだと考えられる。「ものづくり」教育を通して失敗したり作り直したり皆で協力し合う中で、感性も生活も豊かにし自分の生き方を問い直すこともできる。つまり、「ものづくり」教育は人間として生きていく価値を知ることができるといえる。課題を発見し、自己、他者、社会とかわり思考し、新たな価値や概念を創造し行動へと向かう生徒の育成にむけて、多くの先生方とこのような学びの機会を今後も大事にしていきたい。

肉じゃがの調理の比較～IoT 家電で調理実習～

報告者：有友愛子（お茶の水女子大学附属中学校）

本校技術・家庭科では、「サステナブルライフを創造する」をテーマに、心豊かな生活の自立を目指しています。サステナブルで豊かな暮らしを目指して、暮らしをカスタマイズする視点を育むことができるよう、多様なひと・こと・ものとのつながりのある学びを意識して取り組んでいます。

情報技術が生活に浸透し、特に家電製品は我々の生活に不可欠な存在になりました。生活に身近で、生徒が試行錯誤可能な IoT 家電に着目して、技術・家庭科の連携により、生徒が創造的思考をはたかせながら暮らしを創造する授業について検討を行うことにしました。創造的な思考を正解の決まっていない問題への主体的な取り組みとして、IoT 家電を用いたプログラミング等による試行錯誤を積み重ね、探究していくことで創造的思考が育まれると仮定して「暮らしとプログラミング」の実践に取り組んでいます。その一つとして、家庭分野では未来志向の食生活について知るための調理実習として、IoT 家電による肉じゃがの調理を比較する授業を行いました。

調理の際の加熱方法は、通常調理としてテフロン加工鍋、自動調理としてオートクッカー（Panasonic）を使用しました。調理方法は、通常調理は教科書記載のレシピ、自動調理は専用アプリケーションの推奨レシピとしました。野菜の調理としての調理技能の習得や調理科学的な視点での学習に加え、調理の簡便性、調理時間、おいしさ等の点からそれぞれの調理を見取り、調理には選択肢があることに気付かせ、プログラマイズされた IoT 調理家電を自分自身の暮らしへの取り入れ方を考えることにしました。

はじめに、自動調理鍋での肉じゃがの調理に取り組みます。下ごしらえをし、食材を内釜に入れ、調味料を加え、アプリで人数等の設定を行ってプログラムを送信し調理を開始します。約 45 分程度の加熱・調理時間の間に通常の鍋での肉じゃがの調理を行います。どの班もほぼ同じタイミングで自動調理鍋と通常の鍋の肉じゃがが仕上がります。

鍋と自動調理鍋の両方で肉じゃがを作って生徒が気付いたこととして、自動調理鍋の方が味がまんべんなく行き渡り、熱の通り具合も均等だったが、鍋の方がじゃがいもがほくほくしていて楽しかった。どちらにもメリット、デメリットがあることに気付き、両方の利点を生かして暮らしに取り入れたいと考えている様子等が見られました。

「これからにいかしたいこと」については、調味料の計量の仕方、野菜の切り方や入れる順番、加熱の仕方とその理由等、調理技能や調理科学的な視点での学びや鍋と自動調理鍋をそれぞれの良さを活かして選択することをあげている生徒が多く見られました。

調理実習の後、生徒に質問紙調査では、「自動調理鍋を自分の暮らしで使ってみたいか」という問いに対しては、87.3%が「はい」、8.2%が「どちらともいえない」、4.5%が「いいえ」と答えました。その理由についての自由記述から、自動調理鍋は時間と手間が省ける、安全に調理ができる、忙しい時に使いたい等のメリットがあげられました。また、通常の鍋で調理をすることで好みの仕上がりにできる、調理の楽しさが得られる等のメリットがあげられました。自動調理鍋を使用することで調理の技能が落ちそうだと心配する考えもありましたが、どちらの調理も食材を切ったり、調味料を計量したりと下準備は自分で行う必要があり、調理の基本的な技能を身に付けなくてはならないという意識を持つことができた様子がうかがえました。

肉じゃがの調理の比較を行った後、夏休みの課題として食生活を工夫するために取り組んだ課題で、肉じゃがの調理を活かした取り組みが見られました。

正解の決まっていない問題への主体的な取り組みにおいて、スマート化された調理を体験することで、IoT 家電を暮らしに取り入れるかどうかを考え、暮らしには選択肢があることに気付き、今後どのような知識や技能を身に付けるべきかについて考えることができました。

サステナブルで豊かな暮らしを目指し、暮らしをカスタマイズする視点を育むための取り組みにおいて、技術分野と家庭分野の横断的なカリキュラムを通して、暮らしを多角的に捉える視点が形成され、創造的思考の活性化につながっていきました。多様なひと・こと・ものとのつながりのある学びを通して、暮らしをカスタマイズする視点を育むために、中学校3年間の学習を通して、暮らしを多角的に捉える視点を形成していくには、どのような視点を取り入れながら授業づくりに取り組んでいけばよいのかを考えていきたいと思っています。



図1 自動調理鍋と通常の鍋で作る肉じゃがの調理の様子

子どもが見通しをもって取り組む木材加工の授業改善 報告者：木島 靖人（関川村立関川中学校）

りをまとめた（省察段階②【結果2】）（図2）。



図2 振り返りシートから見通しを読み取る

5 実践の結果

1時間目は、全体的に、工具の視点の持つ場所と力の入れ方に注目して、釘のうちやすい、穴のあけやすい方法を探していることが分かった。2時間目、生徒に対して、目標の選択肢を示し、工具の使用目的を焦点化させることで生徒Aは、省察段階①で「真ん中を持つと釘が入りやすい」とげんのうの持つ場所を探してやりやすい方法を探している。本時の予見段階②では、目標の選択肢から、肘を意識して打つと方略の見通しをもち始める。活動を終えて、省察段階②では、「肘だけではなく最後は手首を使うことで傷がつかないこと」の方略の見通しと「太く穴を開けるのではなく、細い穴をあけること」目標の見通しをより具体的に説明している。このように、全体的に予見段階②から省察段階②にかけて、前時の振り返りから自身の見通しを具体的に記入している様子があった（図3）。

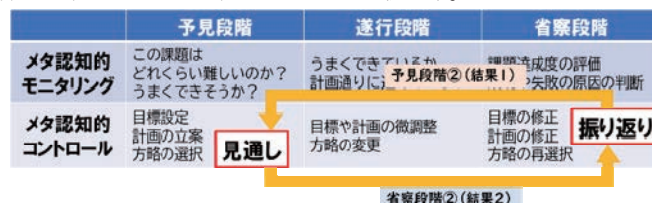


図3 振り返りと見通しの循環

6 本実践の可能性と今後の課題

その後の授業で、「のこぎりの使い方」について学習する。対象生徒は、きりとげんのうと同じように使いやすい方法を探そうとした。授業後の振り返りでは、持ち方や力の入れ方（主に固定）について工具の視点から見通しをもとうとする記述があった。この様子は「過去に学んだことや経験したことは他の学習にも活用できる知識」であるメタ認知的知識へ変容していると推測している。

見通しと振り返りを循環することで、生徒は工具の使い方を共通する視点を通して学んでいる。今後の実践では、対象生徒の始め・中盤・終盤と長い期間での取り組みの姿や記述内容に注目し、授業デザインが見通しを促す上での働きを明らかにしたい。

参考文献

- 1 稲垣佳子 波多野諄余夫（1989）．『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』．中公新書
- 2 三宮真智子（2022）．『メタ認知 あなたの頭はもっとよくなる』．中公新書ラクレ

1 研究の背景と目的

私は、ものづくりの授業が「教えないとできない」という伝統的学習観に基づいていたため、子どもが見通しをもって主体的に学習を進められない状況を生んでいたことに気付いた（稲垣 波多野, 1989）。そこで本研究では、「子どもは自ら学ぶ存在である」という新しい学習観に立つことを模索し、技術科の問題解決学習において見通しをもって主体的に取り組める授業デザインを明らかにすることを目的とする。

2 見通しをもって取り組む授業デザインへの改善

私は、子どもが自ら学びを進めるためには、学習の見通しをもとうとするメタ認知活動が重要であると捉えた（三宮, 2022）。メタ認知は時系列で働くことから、授業の「導入・展開・まとめ」を、予見・遂行・省察の三段階として再構成した。特に予見段階（メタ認知コントロール）では、振り返りを基に目標や計画、方略を自ら選択する所に「見通し」を位置付けた（図1）。さらに、授業の省察が次の授業の見通し（予見）へとつながるよう、単元全体の構成を見直すことを授業デザインの改善方針とした。

	予見段階	遂行段階	省察段階
メタ認知的モニタリング	課題の困難度の評価 課題達成の可能性を予測	課題の困難度の再評価 課題遂行や方略の点検 課題達成の予想とズレの察知	課題達成度の評価 成功や失敗の原因の判断
メタ認知的コントロール	目標設定 計画の立案 方略の選択	目標や計画の微調整 方略の変更	目標の修正 計画の修正 方略の再選択

図1 授業デザイン「見通しと振り返り」の位置づけ

3 伝統的な学習観を転換するための題材の構想

私はこれまで、ものづくりの製作場面において、教科書に示された製作工程（けがき→切断→部品加工→組み立て→仕上げ）の順で工具指導を行っていた。しかしこの方法では、次の作業に必要な工具の使い方が分からなかった。そこで、ものづくりを行う前に工具の使い方を扱いやすい順（きり→げんのう→のこぎり）に学べるようにした。

4 実践の概要

本実践は、1時間目では、私は子どもに工具を扱う際の4つの視点（「持ち方」「力の入れ方」「体の使い方」「道具の特徴」）を提示し、使いやすい方法を探る活動を行った。子どもは、活動を通して見つけた気付きを振り返りシート（省察段階①）にまとめた。2時間目は、前時の活動から工具の使いやすい方法を探究し始めた子どもに、学習課題と目標の選択肢を提示した（予見段階）。子どもは、「釘が（あけた穴に対して）安定するために」などの観点から次の見通し（予見段階②【結果1】）をもち、活動の振り返

<東京都活動報告>

2025 年度の活動は、実行委員会をオンラインで8回開催し、昨年と同じく江戸川区小学校すくすくスクール(児童館と学童クラブの機能を兼ね備えたような放課後児童育成施設) 2 か所で8月に縫い物、12月に編み物講座を開催した。また、3月には小中高の家庭科の教員や編み物に興味のある方を対象として、編み造花の実技講習会を開催した。

その際に活動補助費を有効に利用させていただいた。お礼を申し上げますとともに今後も継続した支援をお願いしたい。以下概要を記す。

A 活動報告

I 児童対象の活動(縫い物、編み物講座の開催)

1 小学校すくすくスクールでの夏の講座

内容:「フェルトポーチ」作りの指導

(1) 西小岩小: 2025 年 8 月 28 日(木) 11:00~16:30

・参加者 18 名—4 年(女子 10, 男子 1)

5 年(女子 4, 男子 1)

6 年(女子 1, 男子 1)

・講師 10 名—東京実行委員 7、会員 2、ボランティア 1

(2) 中小岩小: 2025 年 8 月 29 日(金) 11:00~16:30

・参加者 19 名—3 年(女子 5, 男子 1)、

4 年(女子 8, 男子 2)、5 年(女子 3)

・講師 10 名—東京実行委員 6、会員 3、ボランティア 1



フェルトポーチ

2 小学校すくすくスクールでの冬の講座

内容:「手編みのマスコット」作りの指導

(1) 西小岩小: 2025 年 12 月 26 日(金) 11:00~16:30

・参加者 21 名—3 年(女子 8, 男子 3)

4 年(女子 3, 男子 2)、5 年(女子 5)

・講師 12 名—東京実行委員 6、会員 1、ボランティア 4、学生 1



手編みのマスコット

(2) 中小岩小: 2026 年 1 月 10 日(土) 11:00~16:30

・参加者 19 名—3 年(女子 8)、4 年(女子 6, 男子 2)、5 年(女子 2, 男子 1)

・講師 13 名—東京実行委員 4、会員 2、ボランティア 6、学生 1

3 成果と課題

- ・夏のフェルトポーチ作りでは、児童アンケートの結果、「とても楽しかった」という回答が 36 名、「楽しかった」という回答が 1 名で、満足度が高かった。楽しさの理由として、「自分で針を持ち、糸で縫うこと」や、「工夫をしてオリジナルのデザインをすること」を挙げた児童が多かった。
- ・冬の手編みのマスコット作りでは、児童アンケートの結果、「とても楽しかった」という回答が 40 名全員で、満足度が非常に高かった。楽しさの理由として、「やったことのなかった鎖編みや細編みは難しかったが、諦めずにやったこと」や、「編み方をゆるくしたり、きつくしたりして大きさが変わったこと」を挙げた児童が多かった。
- ・講師陣は、実行委員と会員だけでなく教職課程の大学生やボランティア等の参加があり、大変ありがたかった。編み物は、児童 1~2 名に講師 1 名という指導体制が組めたので、初心者に対しても丁寧な指導ができた。
- ・家庭科未履修の小学 4 年以下でも男女ともに興味・関心・意欲があれば、製作できるとの思いを強くした。

II 小中高校家庭科教員及び編み物に興味のある方を対象とした活動

1 実技講習会の開催

・日時: 2026 年 3 月 26 日(木) 9:00~13:00

昼食交流会(自由参加) 13:00~14:00

- ・会場: 愛国学園短期大学 被服学実習室、学生ホール
- ・内容: 編み造花・野ばらを編んでみよう
- ・講師: 北川ケイ氏(レース編み師範、日本近代西洋技芸史研究家、東京実行委員会委員)

- ・参加費：1,000 円 ・募集人員：25 名（先着順）
- ・参加者：9 名 教員（高等学校 4, 短大 1, (元) 高等学校 1, (元) 大学 1)、学生 2

2 講習会の内容のポイント

- ・明治期に、宣教師から伝わった編み方技術から生まれた編み造花の歴史に触れる。同時期、アイルランドで生まれたアイリッシュレースの野ばらの編み方と歴史と比較する。
- ・実際に編んで、日本の編み造花の編み方の創意工夫を取得する。
- ・編み造花独特のパーツの束ね方と花の表情を出して仕上げる芸術としての編み造花製作を楽しむ。

3 成果と課題

- ・レース編みの経験者を対象にしたが、技術指導のサポートとして研修を受けた講師を各グループに 1 人ずつ付けることによって講座を円滑に進めることができた。
- ・製作が順調に進み、編み物技術の復習と明治期の芸術としての編み造花製作を楽しめる講習となった。
- ・過去に身に付けた技術は、体で覚えており、編み物を愉しむことに繋がった。
- ・家庭科の授業内容から編み物が削除されて研修の需要がなくなり、家庭科教員の講習への関心度が薄くなっているように思われる。しかし、小学生を対象とした編み物講座では、技術の習得と共に個性を活かせることが編み物の魅力として児童に伝わっているので、対象を広げて編み物の魅力を伝えることも検討の余地があるかもしれない。



B 課題

- 1 「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的の中に児童を通した保護者への家庭科教育の PR がある。それをどのようにして行うかを考える。
- 2 現任教員の要望を組み入れた研修と情報交換の場をいかにして提供し、家庭科教育の充実・発展につなげていくかを考える。

(文責 日本栄養大学 井元りえ)

レース編み講師、日本近代西洋技芸史研究家
北川ケイ)

<千葉県活動報告>

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、第 13 回学習交流会を 2026 年 3 月 22 日（日）に千葉大学にて開催しました。今年度は古濱裕樹先生（千葉大学教育学部）によるワークショップ「三原色の染料で彩る 16 色の羊毛カラーチャート～家庭科と自然科学の繋がりを探究する～」を行いました。被服分野での初めての試みで、参加者は中学校・高等学校・大学の教員、大学教員 OG の 13 名でした。

ワークショップでは、天然染料（天然色素）の藍（青）、クチナシ（黄）、ラック（赤）の三原色を基に重ね染めによる多色展開を試みました。羊毛を 16 色に染め上げカラーチャートを完成させました。※ラックは中央アジアに生息するラックカイガラムシから得られる赤色染料。

<染色手順とカラーチャート完成>

1. 藍（青）、クチナシ（黄）、ラック（赤）担当の三グループにわかれ、原液を作り希積分注ガイドに従い濃度の違う 5 種類の染液を準備しました。
2. 16 色の配合マトリックス（表①）に従い、重ね染めの手法で染色を行いました。今回は学校現場や課外活動でも導入しやすい羊毛（原毛トップ）をお茶パックに詰めて染色しました。古濱先生から天然染料で染色する際の鉄則として「(先) 藍>ラックまたはクチナシ (後)」の順番を必ず守るようにとの注意がありました。人工染料での染色は染料を一緒に混ぜて色がでるが、天然染料は一度二度と染めを重ねる必要があり、染め順は必ず藍から行います。
3. 古濱先生も含めて全員で 16 色を染め上げました。お茶パックから水分を取った羊毛を取り出し、人数で等分しました。各自 16 色を持ち帰り、乾燥させた後、台紙に「カラートライアングル」を書いて完成させました（写真①）。天然染料なので思うように染まらないこともあり、今回は黄が少し弱かったようです。

<参加者感想より 自然科学への繋がり>

- 染色を学び直すよい機会になりました。単に染色の手順を作業として進めるのではなく、なぜこのような方法をとるのか、グループの方とも共有確認して進めることができました。本日の実習のねらいの科学的、教育学的視点は達成できたと感じました。
- 混色の理論が視覚的に理解でき 16 色のサンプルが完成したときは色の奥深さをあらためて感じました。先生の説明もわかりやすく学校現場でもすぐに活かせる工夫があり、大きなヒントをいただきました。
- 自然の動植物を利用しその組み合わせで新たな色が作り出されたことにとても興味深く学びました。最後のトライアングルで並べた時は達成感を得ることができました。

○染まりやすさが、絹→羊毛→ナイロンであることの説明をうけ、繊維の特徴を確認できる場面ではより理解が深まりました。

○染色の作業途中で羊毛が20℃以下だとスケールがあるので水をはじくことなどは、知識を活かしたものづくりにつながる過程であると実感出来ました。

○クチナシ(黄)は準備薬品が少なく中学校でも試しやすいでした。染める面白さ、自分の服の繊維に興味を持たせるためにも授業に取り入れてみたいと思います。古濱先生から染料・繊維の特徴や歴史などいろいろなお話を伺い、かつての時代(奈良・平安)の衣装や生活にも思いを馳せることもできました。生活を取り巻く様々な分野への繋がり・広がりも学べたワークショップになりました。

今年度も活動補助費を有効に利用させていただき感謝申し上げます。(文責 小谷教子)

<表① 16色の配合マトリックス>					
担当班	番号	藍	ラック	クチナシ	色イメージ
藍	藍1	1.0	—	—	純粋な青
	藍2	0.75	—	0.25	青みの強い緑
	藍3	0.50	—	0.50	鮮やかな緑
	藍4	0.25	—	0.75	黄みの強い緑
	藍5	0.50	0.25	0.25	淡い青緑
ラック	ラ1	—	1.0	—	純粋な赤
	ラ2	0.25	0.75	—	赤みの強い紫
	ラ3	0.50	0.50	—	鮮やかな紫
	ラ4	0.75	0.25	—	青みの強い紫
	ラ5	0.25	0.50	0.25	淡い赤紫
クチナシ	ク1	—	—	1.0	純粋な黄
	ク2	—	0.25	0.75	黄みの強い橙
	ク3	—	0.50	0.50	鮮やかな橙
	ク4	—	0.75	0.25	赤みの強い橙
	ク5	0.25	0.25	0.50	洗い黄土色
講師		0.33	0.33	0.33	グレー



<写真① カラートライアングル>

事務局からのお知らせ

1. 年会費の納入をお願いします。

2026年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。9月30日までに納入をお願いいたします。

2. 学習交流会等への活動補助費を支給しております。

本ネットワークでは、各都道府県等での学習交流会・講演会・勉強会等の活動を支援しております。

本年度も例年どおり活動補助費(1万円)を支給しております。希望される場合は事務局までお申し出ください。

3. メーリングリスト(ML)にメールアドレスを登録し、情報発信・交換等に活用ください。

MLを活用して、迅速な情報配信や交流をはかりたいと考えております。多くの皆様の登録・活用をお願いいたします。総会や学習交流会、各関連団体からの研修会等のご案内や会員同士の意見交換等並びに事務局からの連絡を行っています。ぜひご登録をお願いいたします。またMLに登録することで各種情報を添付ファイルをつけて配信することができます。情報の配信に不慣れな場合は、事務局にお知らせいただければ事務局から配信いたします。

MLへのメールアドレス登録及び変更は、事務局(seikatsu_nt@yahoo.co.jp)までお願いいたします。

MLアドレス: seikatsunetmail-ml.seikatsunet.com@ml.seikatsunet.com

4. 新版ビジュアルパンフレット(2019年4月版)を活用ください。

新版ビジュアルパンフレットは、新学習指導要領への対応及び資料を更新するなど大幅な改訂を行い、内容を充実させています。家庭科、技術・家庭科の学びの重要性を理解していただく資料として、すでに大学の授業や研究会、情宣活動等に活用いただいております。

パンフレットがご入用な方は事務局までご連絡ください。

・パンフレット代: 無償

・送料: 会員拡大用を使用する際は無料

大学等の授業で活用される場合は、30部迄は無料、31部以上の場合には着払で送料をご負担いただきます。

なお、HPにパンフレットのデータが掲載されています。ご自由に印刷してお使いください。

5. ニュースレター送付先住所の変更について

勤務先の異動、引っ越し等でニュースレター送付先住所が変更になった場合はお早めに事務局までご連絡ください。なお、送付先は、原則自宅住所でお願いします。

6. 退会届の提出について

退会される場合は「退会届」の提出をお願いしております。ホームページに「退会届」の書式が掲載されておりますので、ご記入の上、メール添付か事務局への郵送でご提出ください。なお、年度ごとの退会となりますので、年会費をお納めの上、退会をお願いします。

事務局メールアドレス: seikatsu_nt@yahoo.co.jp

ホームページURL: <https://ssl.xrea.com/seikatsunet.g3.xrea.com/>

「生活やものづくりの学びネットワーク」第17回（2026年）総会資料

【報告事項】

I 2025年度活動報告（2025年4月1日～2026年3月31日）

1. ネットワーク参加人員数

2026年3月31日現在 個人会員230名 団体会員17団体

2. 交流会の開催

○公開フォーラム

日 時：2025年9月21日（日）13：30～16：00 オンライン（Zoom）開催

テーマ：学校教育が担うものづくりに関わる資質・能力の未来 ―中学校技術・家庭科の動向をめぐって―

第1部 報告

講 師：村松 浩幸氏（信州大学・前日本産業技術教育学会会長）

工藤 由貴子氏（和洋女子大学・前日本家庭科教育学会会長）

第2部 パネルディスカッション

パネラー：村松 浩幸氏、工藤由貴子氏

鈴木 賢治氏（本ネットワーク世話人・産業教育研究連盟）

浅井 直美氏（全国家庭科教育協会）

コーディネーター：鈴木 明子氏（元広島大学・本ネットワーク世話人代表）

○春の学習交流会

日 時：2026年3月15日（日）13：30～16：00 オンライン（Zoom）開催

テーマ：「多様性と「ものづくり」教育の実践：次期学習指導要領をみすえて」

・報告（技術） 木島 靖人氏 新潟県関川村立関川中学校技術科教諭

テーマ「子どもが見通しをもって取り組む木材加工の授業改善」

・報告（家庭） 有友 愛子氏 お茶の水女子大学附属中学校家庭科教諭

テーマ「肉じゃがの調理の比較～IoT家電で調理実習～」

グループディスカッション

司 会 齋藤 美重子氏（本ネットワーク世話人）

3. ロビー活動

なし

4. 会員の交流および宣伝活動

① ニュース発行 第29号（2025年8月）、第30号（2026年2月）が発行された。

② メーリングリスト上での情報発信や意見交換が行われた。

③ ホームページの管理 ネットワークの運営に関わる情報を適宜提供した。

5. 各会議の開催

(1) 総会 書面審議とし、異議なく承認された。

第16回総会資料は「生活やものづくりの学びNet ニュース」29号（2025年8月発行）に掲載

内容 【報告事項】 I 2024年度活動報告 II 2024年度決算報告

【審議事項】 I 2025年度活動方針 II 2025年度予算案 III 2025年度運営体制

(2) 実行委員会

東京都、千葉県の学習交流会実施について、「生活やものづくりの学びNet ニュース」31号の掲載で報告

(3) 世話人会

第1回 2025年6月3日（火） 19:00～20:30 Zoom

第2回 2025年7月15日（火） 19:00～20:30 Zoom

第3回 2025年9月24日（水）～30日（火） メール会議

第4回 2025年11月18日（火） 19:00～20:30 Zoom

第5回 2026年1月28日（水） 19:00～20:30 Zoom

Ⅱ 2025 年度 決算報告 (2025. 4. 1～2026. 3. 31)

収入の部

(単位:円)

科目	予算	決算	備考
2024 年度繰越金	1,067,440	1,067,440	
個人会員年会費	230,000	217,000	延べ217人 (20年1件、21年3件、22年5件、23年6件、24年25件、25年133件、26年以降44件)
団体会員年会費	140,000	140,000	1口5000円、なるべく2口以上、延べ17団体 (25年17件)
寄付	20,000	61,000	7件
雑収入	0	0	
利息	600	2,003	
計	1,458,040	1,487,443	

※個人会員 230 名 団体会員 17 団体 (2026. 3. 31 現在)

支出の部

(単位:円)

科目	予算	決算	備考
印刷代	100,000	90,310	リーフレット、入会申込書、ニュースレター (2回)
送料	100,000	73,846	ニュースレター発送、資料・パンフレット等の発送代
事務用品	5,000	0	
活動費	60,000	20,000	地区活動補助 (2件)
HP・ML 管理費	40,000	29,525	HP 更新、ML 管理 (メールサーバー使用料、ドメイン更新料)
会議費	2,000	0	
イベント運営費	100,000	40,165	フォーラム・春の学習交流会の講師謝礼、振込手数料
事務局・アルバイト謝金	105,000	126,000	会計、会費管理、名簿管理等 (※2025 年度第4 回世話人会にて増額決定)
日本家庭科教育学会事務局使用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	926,040	0	
小計	1,458,040	399,846	
次年度繰越金 (残高)	0	1,087,597	
計	1,458,040	1,487,443	

監査の結果相違ありません

2026 年 5 月 11 日

会計監査 新井映子 ㊞

会計監査 丸田直美 ㊞

【審議事項】

I 会則の改訂について

＜提案内容＞ 本ネットワークの会員数の減少及び実行委員会委員の活動推進が厳しい状況にある。活動の維持・活性化をはかるために、これまでの活動単位（都道府県）に、個人会員が子供や教員、保護者等を対象として行う研修等の活動も実行委員会の活動と同様に認め補助対象とすることを提案する。

そのために、以下に示す会則（第7条、第3項）の文言を修正することについてお認めいただきたい。

第7条(組織・運営)

3) 実行委員会

- ①各県ごとにまたは複数の県で実行委員会を組織し、各県を中心として、本会の活動(第6条)の推進・実行を会員と共に行う。
- ②実行委員会は各県ごとに正副2人以上の責任者を決め、活動を企画、実行する。
- ③②実行委員会は世話人会から委託された者または希望する者会員で、世話人会の承認を得た者により構成される。
- ④③実行委員会は2年を任期とし、再任を妨げない。

II 2026 年度活動方針 (2026. 4. 1～2027. 3. 31)

1. 生活やものづくりに必要な学びの意義について広く討論をすすめる

- ① 学校や教育課程の在り方を含めて、生活やものづくりの学びについて、フォーラムや学習会等を開く。
- ② マスメディアなどを通して活動を広報する。

2. 生活やものづくりのための授業・実践活動を充実させ、交流する。

- ① 各県・各地域の授業・実践活動を中心とした学習交流会を開催する。
- ② 授業・実践活動交流会は、保護者や地域の人々の協力を得るように努める。
- ③ 授業・実践活動交流会などの小集会には、補助金 1 万円を支給する。

3. 啓発・宣伝および会員の拡大をする

- ① 学習指導要領の改訂や新しい教育動向を反映させた新版のビジュアルパンフレット（2019 年 4 月版）等を活用し、生活やものづくりの学びの意義を広くアピールするとともに、勧誘リーフレット（2024 年改訂版）を用いて会員を増やす。
- ② HP を充実させ、本ネットワークの意義と活動を知らせていく。

4. 会員相互の交流を活発に行う

- ① ニュースレターを年 1・2 回発行する。
- ② メーリングリストや HP を活用し、会員相互の活発な情報交換の場とする。

5. ロビー活動を行う

- ① 世話人会と事務局はロビー活動を推進する。
中央教育審議会委員や関係部署に、家庭科、技術・家庭科の充実に関する要望書を送付するほか、面談の機会を持つようにする。
- ② 各実行委員・会員は、ロビー活動を行い、状況を把握し、会員に情報を伝達する。

III 2026 年度 予算案 (2026. 4. 1～2027. 3. 31)

収入

(単位:円)

科目	決算 (2025)	予算 (2026)	備考
前年度繰越	1,067,440	1,087,597	
個人年会費	217,000	230,000	1 口 1000 円× (延べ 230 人)
団体年会費	140,000	140,000	1 口 5000 円、なるべく 2 口以上 (延べ 17 団体)
寄付	61,000	20,000	
雑収入	0	0	
利息	2,003	2,000	
合計	1,487,443	1,479,597	

支出

(単位:円)

科目	決算 (2025)	予算 (2026)	備考
印刷代	90,310	100,000	リーフレット、入会申込票、ニュース (2 回発行)、資料コピー
送料	73,846	100,000	ニュース、資料・パンフレット等の発送代
事務用品	0	5,000	封筒、ラベル
活動費	20,000	60,000	ロビー活動、小集会・学習交流会地区活動補助
HP・ML 管理費	29,525	40,000	HP 更新、ドメイン・メールサーバー使用料
会議費	0	2,000	世話人会・実行委員会の会議費
イベント運営費	40,165	100,000	フォーラム・春の学習交流会の講師謝礼、振込手数料、会場費等
事務局・アルバイト謝金	126,000	126,000	会計、会費管理、名簿管理、発送作業等
日本家庭科教育学会事務所用料	20,000	20,000	資料等の保管
予備費	0	926,597	
次年度繰越金	1,087,597	0	
合計	1,487,443	1,479,597	

IV 2026 年度 運営体制

◎世話人代表 ○世話人副代表

	2025.10～2026.9	2026.10～2027.9	
世話人	◎高木 幸子	◎高木 幸子	日本家庭科教育学会
	○石井 克枝	○石井 克枝	全国家庭科教育協会
	○鈴木 賢治		産業教育研究連盟
	後藤 直		産業教育研究連盟
	大矢 英世	大矢 英世	家庭科教育研究者連盟
	森田 美佐・杉山 久仁子	杉山 久仁子	(一社)日本家政学会
	佐藤 ゆかり	佐藤 ゆかり	(一社)日本家政学会家政教育部会
	小田 奈緒美・吉井 美奈子	吉井 美奈子	日本消費者教育学会
	齋藤 美重子・妹尾 理子	妹尾 理子	日本家庭科教育学会関東地区会
	赤塚 朋子	赤塚 朋子	(一社)日本家政学会生活経営学部会
	篠原 久枝	篠原 久枝	(一社)日本調理科学会
	土屋 善和	土屋 善和	日本家庭科教育学会
会計監査	新井 映子 丸田 直美 久保 桂子	丸田 直美 久保 桂子	
実行委員	各県、正・副2名を基本とする		★任期は総会から総会まで（例年9月の第4日曜日）としています。
事務局	浅井 直美 小谷 教子 坪内 恭子 高橋 礼子 檜府 暢子	浅井 直美 坪内 恭子 檜府 暢子 高橋 礼子	

総会について

※総会につきましては、今号の掲載をもって書面審議とさせていただきます。ご意見等がありましたら、9月19日(土)までに事務局にメールでご一報ください。ご意見がない場合は、ご承認いただいたものとみなします。なにとぞよろしくお願いいたします。

会員継続のお願いと新規入会のお誘い

★本会は、2010年の設立以来、多くの会員の方々に支えていただき、有意義な活動を継続してまいりました。これからも、このネットワークの主旨を改めて共有しつつ、時代に添ったあり方を問うていきたいと思ひます。皆様のお力添えをいただきながら、新たな生活やものづくりの学びの意義と実践の成果を発信・共有してまいります。どうぞ会員の皆様の引き続きのご協力をいただきますとともに、関係の学協会、個人会員の方々にお声掛けをいただき、多様な組織の会員によって構成されている本ネットワークの意義をお伝えいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

★学習指導要領の改訂に向けて、教育課程が変わろうとしています。大勢に流されることなく、技術科、家庭科の本質を追究し発信していくことが求められています。家庭科、技術科の魅力を共有できるこのネットワークの場の存在を、会員の皆様の個々の活動の中でお知らせいただき、つながりを広げていきませんか？入会届やリーフレット・パンフレット等はホームページからダウンロードできます。広く入会をお勧めくださるようお願いいたします。

世話人代表 高木 幸子

「次期学習指導要領と技術科・家庭科の学習における『対話』」

【今回のフォーラムの趣旨】

学習指導要領の改訂に向け、学校教育における各教科等の目標や内容の検討が進められています。生活や社会を豊かにする教科である「技術科」「家庭科」において、これからどのような授業の実施が求められているのでしょうか。そして教師は、どのような点を大切にして学習を構成・運営していくべきでしょうか。

本フォーラムでは、学習における「対話」に関するご研究を蓄積されてきている一柳智紀氏に「学習における対話」の概念や、今なぜこの視点が重要なのかをご講演いただき、それを受けて家庭科・技術科の双方から豊かな実践の具体と、それを支える環境についての報告をいただきます。つづくパネルディスカッションでは、一柳氏に「対話」の視点から実践を読み解いていただき、技術科・家庭科の教育に関わる我々が「豊かなものづくりの場＝授業と環境」をどのように守り、次代へ繋いでいくべきかについて、参加者のみなさんとともにディスカッションを行いたいと思います。

開催日時と方法

2026（令和8）年9月27日（日） 10時～12時

※参加費無料、要事前申込：9月17日（木）までに下の2次元コードからお願いします。

【プログラム】

開会行事・趣旨説明 10:00～10:10

【第1部】講演 10:10～10:40

「教室の対話から見える子どもの姿と学び(仮)」

講師：一柳 智紀 氏 東京大学大学院 教育学研究科 准教授(教育心理学)

【専門分野】教育心理学、授業研究、学習における「対話」の分析

報告 10:40～11:15

(1)技術科：東原貴志氏 上越教育大学大学院学校教育研究科 教授

(2)家庭科：高木幸子氏 本ネットワーク世話人代表、日本家庭科教育学会副会長

【第2部】パネルディスカッション：「対話」から実践を捉える 11:15～11:50

「ものづくりを中核とする授業における対話とそのありよう」

一柳先生を交え、技術科・家庭科のカリキュラムに関わる研究者と共に、教科における学習構成や授業改善へのアプローチや課題について語ります。

一柳氏 × 東原氏 × 高木氏

進行：佐藤ゆかり（上越教育大学）

生活やものづくりの学びネットワーク

公式サイト <https://ss1.xrea.com/seikatsunet.g3.xrea.com/>

申込URL：<https://forms.gle/iKFxwmwAd4VTRvpq7>

問合せ先：seikatsu_nt@yahoo.co.jp



お申込みは公式サイト
または左の2次元コード
からお願いします。